

健胃薬

製品群No. 11

ワークシートNo.9

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					適応量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
酵母	乾燥酵母	乾燥酵母「ホエイ」	乾燥酵母は含有する諸成分が総合して栄養補給、代謝機能促進、食欲増進、整腸などの薬効を現す。				頻度不明(大量投与による下痢)							大量で下痢			乾燥酵母として、通常成人1日5~10gを3回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	ビタミンB群、たん白質の需要が増大し、食事からの摂取が不十分な際の補給	
	塩化カルニチン	アペタイン液	副交感神経興奮薬。胃液中のペプシン量と総酸度の増加				頻度不明(胸やけ、嘔気等)			過敏症(増悪)、急性肺炎又は慢性肺炎で急性増悪がみられる(症状が増悪)	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、新生児・未熟児					塩化カルニチンとして、通常成人1日100~600mg(本剤1~6 mL)を3回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	消化管機能低下のみられる慢性胃炎		
胃腸機能調整成分	マレイン酸トリメブテン	セレキノン錠	胃腸機能調整薬。運動調節作用、運動機能障害				0.1%未満[便秘、下痢、腹痛、口渇、口内しびれ感、悪心、嘔吐、心悸亢進、眠気、めまい、けん怠感、頭痛、AST(GOT)・ALT(GPT)の上昇、誘尿障害、尿閉]	0.1%未満(過敏症)			妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、小児						1 マレイン酸トリメブテンとして、通常成人1日量300mg(錠3錠、細粒1.5g)を3回に分けて経口投与。高齢者では減量。 2 マレイン酸トリメブテンとして、通常成人1日量300~600mg(錠3~6錠、細粒1.5~3.0g)を3回に分けて経口投与。高齢者では減量。	1 慢性胃炎における消化器症状(腹部疼痛、悪心、あじ、腹部膨満感) 2 過敏性腸症候群	

整腸薬

製品群No. 12

ワークシートNo.10

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用に より重大な問題 が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	薬理・毒性に 基づくもの			特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)
乳酸菌成分	アシトフィル ス菌末																			
	ビフィズス菌 末	ビフィズダー	ビフィズス菌は、腸内で増殖し、乳酸と酢酸を産生して腸内菌叢の正常化をはかり、整腸作用をあらわす(ビオフェルミン錠)					頻度不明(軟便)											通常、成人1日3～6錠を3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	効能又は効果 腸内菌叢の異常による諸症状の改善
	ラクトミン	フソウラクト ミン末	ラクトミンは、腸内菌叢異常の原因を除き、バランスの回復、諸症状の改善に有効																通常成人1日3～9gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
	ラックビー	ラックビー ラックビー微 粒	腸内菌叢改善作用: 健康成人に本剤を投与したところ、ビフィズス菌が増殖し、腸内の優勢菌叢を増し、腸内菌叢の正常化を促すとともに、ビフィズス菌により産生される酸により、腸内pHを低下させ、有害細菌が増殖し難い環境をつくる。					アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1～5%未満(腹部膨満感)		本剤過敏症の既往歴、牛乳に対してアレルギーあり[アナフィラキシー様症状を起こす]								通常成人1日3～6gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
	ラクボン	ラクボン	本剤は腸管内で発芽・繁殖し(マウスの実験から)、乳酸を産生して腸内の腐敗細菌叢の増殖を抑制して、整腸作用を営む。																通常成人1日3～6gを3回に分割経口投与する。小児は通常1日1.5～3gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	腸内菌叢の異常による諸症状の改善
腸内菌成分	善入菌末	ミヤBM細 粒	腸内細菌に対する作用、化学療法剤投与時における整腸作用、その他整腸作用を有する																腸内菌叢の異常による諸症状の改善	通常、成人1日1.5g～3gを3回に分割経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。

消化薬

製品群No. 13

ワークシートNo.11

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 蓋用のおそれ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を繰るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
でんぶん消化酵素 蛋白消化酵素	ジアスターゼ	ジアスターゼ	アマラーゼとしてでんぶん分解をする。					5%以上または頻度不明(過敏症)		本剤に対し過敏症既往歴									1回0.3~0.5g、1日3回、適宜増減	主として炭水化物の消化異常症状の改善
	ジアスマン	単味なし																		
	ニューラーゼ	単味なし																		
	プロザイム	単味なし																		
脂肪消化酵素	ホリバーゼ	単味なし																		
	リバーゼ	単味なし																		
繊維消化酵素	セルラーゼ	単味なし																		
	セルロシン	単味なし																		
複合消化酵素	タカヂアスターゼ	タカヂアスターゼ	主として炭水化物の消化					頻度不明(過敏症)											1回0.2~0.3g、1日3回、適宜増減	主として炭水化物の消化異常症状の改善
	バンクレアチン	バンクレアチン	消化作用					5%以上または頻度不明(過敏症)		本剤過敏症既往歴、ウシまたはブタ蛋白質に対し過敏症既往歴					直ちに飲み干す(小児が過って本剤を大量に停滞させたため、口内炎、口腔内潰瘍を起こしたとの報告がある)、粉末を吸入しない(気管支けいれん、鼻炎の報告)			1回1g、1日3回、適宜増減	消化異常症状	
	ピオヂアスターゼ	単味なし																		
	ピオタミラーゼ	単味なし																		

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 断るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化			
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
胆汁成分	ウルソデオキシ ンコール酸	ウルソ錠	利胆作用及 び胆汁うっ滞 改善作用、肝 機能改善作 用、胆石溶解 作用		スルフォニル尿素系経口糖 尿病用薬(血糖降下作用増 強)、コレスチラミン等・制酸 剤・脂質低下剤(本剤の作用 減弱)	間質性肺炎 (頻度不明)	1~5%未満 (下痢)、0.1~ 1%未満(悪 心、食欲不 振、胸やけ、 AST(GOT)・ ALT(GPT)・ ALP上昇)、 0.1%未満 (嘔吐、腹 痛、便秘、胃 不快感等、全 身けん怠感、 めまい、白血 球減少)、頻 度不明(ビリ ルビン上昇、 γ-GTP上 昇)		完全胆道閉塞(症 状憎悪)、劇症肝 炎(症状憎悪)	重篤な腸疾患、消 化性潰瘍、胆管胆 石、妊婦又は妊娠 している可能性 のある婦人、原発性 胆汁性肝硬変にお ける肝機能の改善 を目的で硬変期で 高度の黄疸のある 場合		原発性胆汁 性肝硬変に おける肝機 能の改善に おいて1日 800mgまで		1.1回50mgを1日3回経口 投与する。 2.1日600mgを3回に分割 経口投与。 3.1日600mgを3回に分割 経口投与する。増量する 場合の1日最大投与量は 900mgとする。 高齢者は用量に注意する	1.下記疾患に おける利胆(胆 道(胆管・胆の う)系疾患及び 胆汁うっ滞を 伴う肝疾患)、 慢性肝疾患に おける肝機能 の改善、下記 疾患における 消化不良(小 腸切除後遺 症、炎症性小 腸疾患) 2.外殻石灰化 を認めないコレ ステロール系 胆石の溶解 3.原発性胆汁 性肝硬変にお ける肝機能の 改善
胆汁末	デヒドロコ ール酸	デヒドロコ ール酸注射液			ショック(注射 投与による) (頻度不明)	頻度不明(悪 心・嘔吐、軟 便、下痢、発 赤、全身掻痒 感、悪寒、発 熱、咳嗽、頭 痛、不快感)		完全胆道閉塞(病 像の悪化)、急性 期の肝・胆道疾患 (炎症に悪影響)、 重篤な肝障害(悪 化)、気管支喘息・ アレルギー疾患 (ショックの報告)	高齢者、12歳以下 の小児、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人		大量投与により 原疾患の悪化		1日100~1000mgを1~3 日間隔で静注。適宜増減	下記疾患にお ける利胆(胆道 (胆管・胆のう) 系疾患および 胆汁うっ滞を 伴う肝疾患	

制酸・健胃・消化・整腸を2以上標榜するもの

製品群No. 14

ワークシートNo.12

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化				
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ					
	アズレンスル ホン酸ナトリ ウム	アズノール 細粒	胃炎・胃潰瘍 治療薬・粘膜 抵抗強化作用 を有し、潰瘍 病巣を保護 する				頻度不明(下 痢・便秘・膨 満感・腹痛・ 悪心・嘔吐 等)												アズレンスルホン酸ナトリ ウムとして、1回2mg(アズ ノール細粒(0.4%)として 0.5g、アズノール細粒 (1%)として0.2g)を1日3回 食前に経口投与(1回量を 約100mLの水又は微温湯 に溶解することが望まし い)。	胃炎・胃潰瘍 における自覚 症状及び他覚 所見の改善
	アルジオキ サ	イサロン	胃炎・胃潰瘍 治療薬・粘膜 抵抗強化作用 を有し、組織 修復を促進 する	テトラサイクリン系抗生物質・ ニューキノロン系抗菌剤(併 用薬の作用減弱)			0.1~5%未満 (便秘)			透析療法(アルミ ニウム脳症・アルミ ニウム骨症)	腎障害、高齢者				アルミニウム 脳症・アルミ ニウム骨症 (腎障害患者)			アルジオキサとして1日300 ~400mgを3~4回に分けて 経口投与	胃潰瘍、十二 指腸潰瘍、胃 炎の自覚症状 及び他覚所見 の改善	
	グリチルリチ ン酸塩	グリチルリチ ン酸モノア ンモニウム・グ リチロン注 一号	抗炎症作用	ループ利尿剤・チアミド系お よび その類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチン 酸または甘 草を含有する 製剤)					偽アルドステロ ン症、ミオパシー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児 等			長期適用に よる偽アルド ステロン症			グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹		
粘 膜 修 復 成 分	レ-グルタミン	グルミン顆 粒	胃潰瘍・十二 指腸潰瘍治 療薬・粘膜抵 抗強化作用 を有し、組織 修復を促進す る				0.1~5%未満 (便秘、口 渇、悪心、顔 面紅潮)											1日1~2gを3~4回に分けて 経口投与。 高齢者では減量。	胃潰瘍、十二 指腸潰瘍の自 覚症状及び他 覚所見の改善	
	ゲファルナ ート	ゲファニ ールカプセル	胃潰瘍・十二 指腸潰瘍治 療薬・粘膜抵 抗強化作用 を有し、組織 修復を促進す る				0.1~5%未満 (便秘、口 渇、悪心、上 腹部不快感)、0.1%未 満(口内炎、 下痢、舌炎、 AST(GOT)・ ALT(GPT)軽 度上昇)	0.1%未満(過 敏症)		妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人	高齢者							ゲファルナートとして1回50 ~100mgを1日2~3回経口 投与。 高齢者では減量。	急性胃炎・慢 性胃炎の急性 増悪期の胃粘 膜病変(びらん、 出血、発赤、 急性潰瘍)の改善、胃潰 瘍・十二指腸 潰瘍	
	銅クロロフ ィリン塩	アルサルミ ン錠	胃炎・消化性 潰瘍治療薬 ・粘膜抵抗強 化作用を有し、潰瘍病巣 を保護する	クエン酸製剤(血中アルミニ ウム濃度上昇)、血清カリウ ム抑制イオン交換樹脂・ ニューキノロン系抗菌剤・ジ ギタリス製剤・フェニトイン・テ トラサイクリン系抗生物質 等・甲状腺ホルモン剤・胆汁 酸製剤(併用薬剤の吸収遅 延・阻害、服用時間をずら す)キニジン(併用薬剤の排 泄遅延)			0.1~5%未 満(便秘、口 渇、悪心)、 0.1%未満 (嘔気等)	頻度不明(発 疹、蕁麻疹 等)		透析療法(長期投 与によりアルミニ ウム脳症、アルミ ニウム骨症)	腎障害(アルミニ ウム脳症、アルミニ ウム骨症)、リン酸塩 の欠乏(リン酸塩の 吸収阻害)、経管栄 養処置・低出生体 重児および新生児 発育不全、高齢者				アルミニウム 脳症・アルミ ニウム骨症 等			1回1gずつ、1日3回経口 投与。	胃・十二指腸 潰瘍、慢性胃 炎、慢性胃炎 の急性増悪期 の胃粘膜病変 (びらん、出 血、発赤、急性 潰瘍)の改善	

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)			使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	
			併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量(誤使用のおそれ)				
粘 膜 修 復 成 分	塩酸セトラキサート	ノイエルカプセル	胃炎・胃潰瘍 治療薬・防御 因子を強化 し、胃粘膜微 小循環改善 作用を有する				0.1~1%未満 (口渇、悪心、 嘔吐、下痢、 便秘、胃部不 快感・膨満 感)、頻度不 明(AST (GOT)上昇・ ALT(GPT)上 昇等)	0.1~1%未満 (過敏症)					塩酸セトラキサートとして1 回200mg(1カプセルまたは 細粒0.5g)を1日3~4回食 後および就寝前に経口投 与	急性胃炎・慢 性胃炎の急性 増悪期の胃粘 膜病変(びら ん、出血、発 赤、急性潰瘍) の改善、胃潰 瘍	
	ソファルコン	セスファルコ カプセル	胃炎・胃潰瘍 治療薬・防御 因子を強化 し、粘膜保 護・組織修復 作用を有する				頻度不明(便 秘、口渇、胸 やけ)	頻度不明(過 敏症)					ソファルコンとして1回 100mgを1日3回経口投与	急性胃炎・慢 性胃炎の急性 増悪期の胃粘 膜病変(びら ん、出血、発 赤、急性潰瘍) の改善、胃潰 瘍	
	メチルメチオ ニンスルホニ ウムクロライ ド	キャベジンU コーワ錠	胃炎・消化性 潰瘍・慢性肝 疾患治療薬 防御因子を 強化し、組織 修復作用を 有する。また 肝障害改善 作用を有する。				0.1%未満(便 秘、下痢、あ い気等)	0.1%未満(過 敏症)						1回25~75mgを1日3回経 口投与。 高齢者では減量。	胃潰瘍、十二 指腸潰瘍、胃 炎における自 覚症状及び他 覚所見の改 善、慢性肝疾 患における肝 機能の改善
消 泡 成 分	ジメチルシリ シロキサン	ガスコン錠	胃内に粘性 粘液除去作 用を有し、消 化管内ガスを 駆除する				0.1~5%未 満(軟便、胃 部不快感、下 痢、腹痛、 0.1%未満 (嘔吐、嘔 気、食欲不 振、胃部重 圧感、頭痛)							1.1日120~240mgを食後 又は食間の3回に分割経 口投与 2.検査15~40分前に40~ 80mgを約10mLの水ととも に経口投与 3.検査3~4日前より1日 120~240mgを食後又は食 間の3回に分割経口投与	1.胃腸管内の ガスに起因す る腹部症状の 改善 2.胃内視鏡検 査時における 胃内に粘性粘 液の除去 3.腹部X線検 査時における 腸内ガスの駆 除

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
副交感神経遮断成分	塩酸オキニフェンサイクリミン																			
	塩酸ジサイクロミン	レスポリミン錠	アセチルコリンによる収縮を抑制し、腸管の自発運動、アセチルコリンによる収縮を抑制する。食物の腸管輸送速度を低下させる。		三環系抗うつ薬(抗コリン作用増強(散瞳、排尿障害、心悸亢進、頻脈、便秘、口内乾燥等)、フェノチアジン系薬(抗コリン作用増強)、MAO阻害薬(抗コリン作用増強))			頻度不明(過視調節障害、眼圧亢進、頭痛、頭暈感、眩暈、眠気、口渇、便秘、悪心、嘔吐、腹部膨満・不快感、鼓腸、食欲不振、心悸亢進、排尿障害、心悸亢進、倦怠感、脱力感)、視調節障害・眼気等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心障害、麻痺性イレウス、自動車等の運転注意(視調節障害、眠気)、	前立腺肥大症、心障害(うっ血性心不全、不整脈等)、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦及び妊娠の可能性、授乳婦、小児							1回10~20mg、1日3~4回経口、適宜増減	下記疾患における他薬・胃・十二指腸潰瘍、幽門痙攣、胃炎、潰瘍性大腸炎、憩室炎、痙攣性便秘、小児の嘔吐、胆のう・胆管炎、胆石症、尿路結石症、月経困難症
	臭化メチルアトロピン	なし																		
	臭化メチルベナクチジウム	配合剤のみ																		
	臭化メチルオクタトロピン	バルピン錠	鎮痙作用、胃液分泌抑制作用		抗コリン作用を有する薬剤(抗コリン作用の増強)、MAO阻害薬(本剤の作用増強)		頻度不明(視調節障害、口渇、悪心、胸焼け、便秘、下痢、食欲不振、腹部膨満感、排尿障害、眠気、めまい、頭痛、不快感、倦怠感)、視調節障害等を起こす事があるので、自動車の運転等危険を伴う機械の操作に従事させない。	過敏症状、顔面浮腫		緑内障、前立腺肥大による排尿障害、重篤な心疾患、麻痺性イレウス	前立腺肥大症、うっ血性心不全、不整脈、高血圧、肝又は腎疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境の患者、高齢者、妊婦又は妊娠の可能性、授乳婦、自動車の運転等(視調節障害、眠気、めまい)							1回10~20mg、1日2~4回経口投与、適宜増減	下記疾患における他薬および疼痛・胃・十二指腸潰瘍、胃炎、腸炎、胆石症	

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化			
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
臭化ブチル スコポラミン	ブスコパン 錠	鎮痙作用、消 化管運動抑制 作用、胃液分 泌抑制作用、 膀胱内圧上昇 抑制作用	三環系抗うつ薬(抗コリン作用(口渇・便秘・眼の調節障害増強)、フェノチアジン系薬(抗コリン作用増強)、MAO阻害薬(抗コリン作用増強)、抗ヒスタミン薬(抗コリン作用増強)	0.1~5% (視 調節障害、腹 部膨満感、鼓 腸、便秘、排 尿障害、頭 痛、頭重感、 心悸亢進)、 頻度不明(口 渇)、視調節 障害・眼気等 を起こす事 があるので、 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作に従事 させない。	過敏症	出血性大腸炎、 緑内障、前立 腺肥大による 排尿障害、 重篤な心障害 、麻痺性イレ ウス、本剤 過敏症既往歴 、細菌性下痢	前立腺肥大症、 うつ血性心不全 、不整脈、潰 瘍性大腸炎、 甲状腺機能亢 進症、高温環 境の患者、高 齢者、妊婦又 は妊婦の可能 性、自動車等 の運転注意(眼 の調節障害)	細菌性下痢 (治療期間の 延長をきたす おそれ)					1回10~20mg、1日3~5 回経口投与、適宜増減	下記疾患にお ける痙攣：胃・ 十二指腸潰 瘍、食道痙攣 、幽門痙攣、胃 炎、腸炎、腸仙 痛、痙攣性便 秘、機能的下 痢、胆のう・胆 管炎、胆石症、 胆道ジスキネ ジー、胆のう切 除後の後遺 症、尿路結石 症、膀胱炎、月 経困難症
臭化チメピジ ウム ヨウ化イソプロ バミド	ロートエキス 散純正	ムスカリン様 受容体におい て副交感神経 性及び外因性 のアセチルコ リンと競合的 拮抗。胃酸又 はペプシン分 泌抑制、抗ス トレス潰瘍作 用、胃細胞保 護作用、小腸 運動または腸 液分泌抑制作 用、鎮痛作用 、血圧降下作 用、鎮けい作 用	三環系抗うつ薬、フェノチアジン系、MAO阻害薬、抗ヒスタミン薬、イソニアジド(本剤の作用増強)	頻度不明(眩 暈、しゅう明 、霧視、視調節 障害、口渇、 悪心、嘔吐、 便秘、排尿障 害、頭痛、頭 重感、めまい 、頻脈)、視 調節障害・眩 暈、しゅう明 、めまい等 があるので、 自動車の運 転等危険を 伴う機械の 操作に従事 させない。	過敏症、顔面 紅潮	緑内障、前立腺 肥大による排 尿障害、重篤 な心疾患、麻 痺性イレウス	高齢者、妊婦又 は妊婦の可能 性、授乳婦、 自動車の運 転等(視調節障 害、眩暈、しゅう 明、めまい)						1日20~90mg、2~3回分 服、適宜増減	下記疾患にお ける分泌、運 動亢進ならび に疼痛：胃酸 過多、胃炎、 胃・十二指腸 潰瘍、痙攣性 便秘
鎮痙成分	塩酸メバヘ リン	平滑筋の弛 緩作用、血管 平滑筋の異常 緊張を抑制し 、血流量を増 加。内臓平滑 筋を弛緩し、 鎮けい作用。	レボドパ(レボドパの作用減弱)	頻度不明(心 悸亢進、血圧 上昇、めまい 、眩暈、頭痛 、便秘、口渇 、食欲不振、 心か部痛、顔 面潮紅、発汗)	頻度不明(ア レルギー性肝 障害、過敏 症、(便秘、 口渇、心悸亢 進))	本剤過敏症既往 歴	緑内障、高齢者 、妊婦、小児						1日200mg、3~4回分 服、適宜増減。高 齢者は減量。	下記疾患にお ける内臓平滑 筋の痙攣症 状：胃炎・胆 道系疾患、急 性動脈硬化、 末梢循環障害 、冠循環障害 における血管 拡張と症状の 改善。
高 所 麻 酔 成 分	アミノ安息香 酸エチル	胃粘膜の知 覚神経末端を 麻痺させ、中 枢への刺激伝 達を遮断して 疼痛、嘔吐を 鎮める。		0.1~5% (食 欲不振、悪心 、口渇、便秘)、0.1%未 満(下痢、メ トヘモグロ ビン血症(小 児))	頻度不明(過 敏症)	本剤過敏症既往 歴、乳幼児	高齢者、妊婦又 は妊婦の可能 性			口内にしひれ 等を残さない ため速やかに 飲み下す	長期連続投 与回避		1日0.6~1g、3回分 服、適宜増減。高 齢者は減量	下記疾患に伴 う疼痛・嘔吐 、胃炎、胃潰瘍

胃腸鎮痛鎮けい薬

製品群No. 15

ワークシートNo.13

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
評価の視点			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
局所麻酔成分	オキセザゼイン	ストロカイン錠	局所麻酔作用、ガストリン遊離抑制作用、胃酸分泌抑制作用、胃腸管運動抑制作用				0.1~5% (食欲不振、悪心、口渇、便秘、下痢、頭痛、眩暈)、頻度不明(眠気、脱力感)	0.1~5% (過敏症)		本剤過敏症既往歴	高齢者、妊婦又は妊娠の可能性、小児			口内にしびれ等を残さないため速やかに飲み下す	長期連続投与回避		1日15~40mg、3~4回分服。高齢者は減量	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発、悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化			
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用、誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
腸内殺菌成分	アクリノール	外用のみ													外用剤から抽出・大量服用時には、悪心、嘔吐					
	塩化ベルベリン	キョウベリン錠100	腸内腐敗、腸蠕動抑制作用、蠕動抑制作用(弛緩作用)、胆汁分泌作用(腸管内における病原菌の増殖を抑える)				0.1~5%未満(便秘)				出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、原則禁忌:細菌性下痢患者(治療期間の延長)	高齢者		出血性大腸炎、細菌性下痢		長期・大量投与を避けること。		塩化ベルベリンとして、通常成人1日150~300mg(本剤)5~3錠を3回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	下痢症	
	クレオソート																			
	タンニン酸ベルベリン	エルベン散	タンニン酸ベルベリンは、腸内でベルベリンとタンニン酸に分解され、その部位でのチフス、赤痢、大腸菌に対する殺菌作用とタンニン酸の収れん防腐作用を期待できる。				頻度不明(便秘)				出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、細菌性下痢(治療期間の延長)	高齢者		出血性大腸炎、細菌性下痢		長期・大量投与を避けること。		タンニン酸ベルベリンとして、通常成人1日150~300mgを3回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	下痢症	
取れん成分	次硝酸ピスマス	次硝酸ピスマス	収れん作用並びに粘膜炎被膜保護作用を有する。胃・十二指腸粘膜に存在するHelicobacter pylori菌に対して抗菌活性がある。		精神神経系障害、亜硝酸中毒(頻度不明)		0.1~5%未満(嘔気、食欲不振)、頻度不明(歯齦縁、舌、口腔内などに青色又は青黒色の着色)				・慢性消化管通過障害又は重篤な消化管潰瘍(ピスマスの吸引による副作用が起こる)・出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、原則禁忌:細菌性下痢(治療期間の延長)	便秘、結腸瘻造設術、回腸瘻造設術又は人工肛門造設術を受けた患者、消化管憩室、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児		出血性大腸炎、細菌性下痢	原則1ヶ月に20日程度(1週間~5日以内)の投与	洗腸には使用しないこと。	長期連続投与(1日3~20g)で昏睡、錯乱、運動障害などの精神神経系障害が現れた		次硝酸ピスマスとして、通常成人1日2gを2~3回に分経口投与する。高齢者では減量。妊婦・小児には、投与量、投与期間などに注意。	下痢症
	次没食子酸ピスマス	次没食子酸ピスマス「Eピス」	二次的にぜん動運動を抑制し、腸内酸化水素と結合しガス刺激を緩和し、止瀉作用を現す。		精神神経系障害(頻度不明)		頻度不明(歯齦縁、舌、口腔内等に青色又は青黒色の着色)、0.1%~5%未満(嘔気、食欲不振)				慢性消化管通過障害又は重篤な消化管潰瘍(副作用が起こる)、出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、原則禁忌:細菌性下痢(治療期間の延長)	便秘、結腸瘻造設術、回腸瘻造設術または人工肛門造設術を受けた患者、消化管憩室、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児		出血性大腸炎、細菌性下痢	原則1ヶ月に20日程度(1週間~5日以内)の投与	洗腸には使用しないこと。	長期連続投与(1日3~20g)で昏睡、錯乱、運動障害などの精神神経系障害が現れた		次没食子酸ピスマスとして、通常成人1.5~4gを3~4回に分経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。妊婦・小児には、投与量、投与期間などに注意。	下痢症
取れん成分	タンニン酸アルブミン	タンナルピン「ホエイ」	本剤は、腸管内で溶液により徐々に分解してタンニン酸を遊離し、全腸管に緩やかな収れん作用をあらわすことにより、止瀉作用を示す。	経口鉄剤(併用により相互作用が減弱)	塩酸ロベラミド(塩酸ロベラミドの効果が減弱)		ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	頻度不明(肝障害、便秘、食欲不振)			出血性大腸炎(症状の悪化、治療期間の延長)、牛乳アレルギー(ショックまたはアナフィラキシー様症状を起こす)、本剤過敏症の既往歴、原則禁忌:細菌性下痢(治療期間の延長)	肝障害、高齢者		出血性大腸炎、細菌性下痢		長期・大量投与で肝障害		タンニン酸アルブミンとして、通常、成人1日3~4gを3~4回に分けて経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	下痢症	

止瀉薬

製品群No. 16

ワークシートNo.14

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な 副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪 化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・ 悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 限るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるも の	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康換 害のおそれ			
吸着成															
沈降炭酸カルシウム	沈降炭酸カルシウム	制酸作用	テトラサイクリン系抗生物質(併用薬剤の効果が減弱)、他の併用薬剤(併用薬剤の吸収・排泄に影響)、牛乳[milk-alkali syndrome(高カルシウム血症・高窒素血症・アルカローシス等)]、ビタミンD(高カルシウム血症)			5%以上又は頻度不明(高カルシウム血症・アルカローシス等の電解質失調・腎結石・悪心・嘔吐・便秘・下痢)、0.1%未満(胃酸の反動性分泌)	5%以上又は頻度不明(過敏症)	甲状腺機能低下症又は副甲状腺機能亢進症(症状悪化)	腎障害、心機能障害、肺機能障害、高カルシウム血症、便秘、高齢者				胃酸の反動性分泌	沈降炭酸カルシウムとして、1日1~3gを3~4回に分割経口投与。高齢者では減量。	胃・十二指腸潰瘍、胃炎(急・慢性胃炎・薬剤性胃炎を含む)、上部消化管機能異常(神経性食思不振、いわゆる胃下垂症、胃酸過多症を含む)の症状の改善
乳酸カルシウム	乳酸カルシウム「エビス」	血清カルシウム値が低下した際に、カルシウム値を上昇させる。本剤は鎮静、けいれん軽減の作用がある。カルシウムは無機栄養素としても重要で、歯や骨の主成分である。	ジギタリス製剤(ジギタリス中毒)、テトラサイクリン系抗生物質(テトラサイクリン系抗生物質の作用が減弱)、ニューキノロン系抗菌剤(ニューキノロン系抗菌剤の作用が減弱)			頻度不明(高カルシウム血症、結石症、腹部膨満感、胸やけ、軟便等)、頭痛、心窩部不快感	頻度不明(過敏症)	高カルシウム血症(高カルシウム血症を増悪)、腎結石(腎結石を増強)、重篤な腎不全(高カルシウム血症)	活性化型ビタミンD製剤を服用中、ジギタリス製剤を投与中、高カルシウム血症が現れやすい病態、高齢者				長期投与により血中及び尿中カルシウムが高値になることがあるので、長期投与する場合には定期的に血中又は尿中カルシウムを検査することが望ましい。結石症。	乳酸カルシウムとして、通常成人1回1g、1日2~5回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。高齢者では減量。	低カルシウム血症に起因する下記症状の改善 テタニー 下記代謝性骨疾患におけるカルシウム補給 妊婦・産婦の骨軟化症 発育期におけるカルシウム補給
ヒドロキシナフトエ酸アルミニウム															

リスクの程度 の詳度	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等)(重篤な 副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪 化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
詳度の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 留意性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・ 悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果
その他の ししや成分	ロベニンカ セルノロベ ミン細粒	止瀉作用 マウスおよび ラットにおけ るヒマシ油ま たはプロスタ グランジン誘 発下痢を強く 抑制する。 消化管輸送 能抑制作用 マウスの小腸 輸送能を用 意依存的に 抑制する。健 康成人にお いて胃酸/リ ウムの消化 管内通過時 間を延長させ る。また、成 人下痢患者 (外国人)の 小腸通過時 間を服薬前 に比較して有 意に延長し た。 蠕動抑制作 用 モルモットの 摘出回腸なら びに生体位 小腸および結 腸の蠕動を 抑制する。モ ルモットを用 いたin vitro実 験から、本剤 の蠕動抑制 作用には、腸 壁内コリン作 動性ニューロ ンの機能の 抑制および腸 管の輪状筋 方向の伸展 によるアセチ ルコリンとプ ロスタグラン ジンの放出の 抑制が関与し ていると考え られている。 抗分泌作用 ラットを用い た実験で、プ ロスタグラン ジンまたはコ レラトキシン の投与によっ て起こる水、 NaおよびClの 腸管腔内へ の分泌を吸 取の方向へ 逆転させた。	ケイ酸アルミニウム・タンニ ン酸アルブミン(本剤の効果 が减弱)、リトナビル・キニジ ン(本剤の血中濃度が上昇)	イレウス (0.1%未 満)、巨大結 腸(頻度不 明)	アナフィラキ シー様症状 (0.1%未 満)、ショッ ク、皮膚粘膜 眼症候群 (Stevens- Johnson症 候群)、中毒性 表皮壊死症 (Lyell症候 群)(頻度不 明)	頻度不明 (頭痛、傾眠 傾向、鎮静、 筋緊張低下、 散瞳、疲労、 体温低下、 発熱、尿閉、 消化不良、 口内不快感、 味覚の喪失)	0.1~5%未 満(過敏症)	動物実験に おいて、大量 投与で薬物 依存性が認め られている ので、観察を 十分に行い、 用量および 使用期間に 注意すること。	出血性大腸炎(症 状の悪化、治療 期間の延長) 抗生物質の投与 に伴う偽膜性大腸 炎(症状の悪化、 治療期間の延長) 低出生体重児、新 生児および8カ月 未満の乳児(過量 投与により、呼吸 抑制、全身性虚脱 心、昏睡等の重篤 な副作用の報告) 本剤の成分に対し 過敏症の既往歴、 細菌性下痢(治療 期間の延長) 潰瘍性大腸炎(中 毒性巨大結腸を 起こす)、6カ月以 上2歳未満の乳幼 児	重篤な肝障害、肛門疾 患、小児、高齢者、妊婦ま たは妊娠している可能性 のある婦人、授乳婦、	本薬の薬理 作用上、便 秘が発現す ることがあ るので、用量 に留意し、便秘 が発現した 場合は投与 を中止するこ と。また、特 に便秘を避 けねばなら ない肛門疾患 等の患者に は注意して 投与するこ と。	止瀉剤による 治療は下 痢の対症療 法であるの で、脱水症 状がみられ る場合、輸 液等適切な 水・電解質 の補給に留 意すること。	外国で、塩酸ロ ベラミド液剤の過 量投与により昏 睡、呼吸抑制、 縮瞳、協調興 衰、筋緊張低 下、傾眠等の中 毒症状がみら れ、また、腸管壊 死に至る麻痺性 イレウスにより死 亡に至った例が 報告されている。 外国で、乳幼児 (特に2歳未満) に過量投与した 場合、中枢神経 系障害、呼吸抑 制、腸管壊死に 至る麻痺性イレ ウスを起こした との報告がある。		塩酸ロベラミドとして、通 常、成人に1日1~2mgを1 ~2回に分経口投与する 。なお、症状により適宜増 減する。用量に留意するこ と。(一般に高齢者では生 理機能が低下している。 妊婦または妊娠している 可能性のある婦人には、 治療上の有益性が危険 性を上回ると判断される 場合のみ投与すること。 *授乳中の婦人には本 剤投与中の授乳は避けさ せること。小児等に対する 安全性は確立していない ので、投与しないことが望 ましい。動物実験におい て、大量投与で薬物依存 性が認められているの で、観察を十分に行い、 用量および使用期間に注 意すること。		

瀉下薬(下剤)

製品群No. 17

ワークシートNo.15

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 常用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性		適応禁忌		慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)		症状の悪化につながるおそれ		適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)				使用方法(誤使用のおそれ)
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの							使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
刺激性下剤成分	ヒマン油	「親性」ヒマン油 ヒマン油は腸内で胆汁の共存下リパーゼの作用によって加水分解されシノール酸ナトリウムを生成し、結腸に影響しないで小腸及び盲腸を収縮して瀉下作用をあらわす。			脂溶性駆虫剤・脂溶性物質(これらの薬剤、物質の吸収を促進)			頻度不明(悪心・嘔吐、腹痛等)	頻度不明(過敏症)				急性腹痛・痙攣性便秘・重症の硬結便(症状の悪化)、ヘノボジ油、メンマ等の脂溶性駆虫剤を投与中(これらの薬剤の吸収を促進して中毒を起こす)、リン、ナフタリンなどの脂溶性物質による中毒時(これらの物質の吸収が促進される)	高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦			60ml	即効性があるため就寝前の服用は避ける	運用で、小腸の消化吸収を妨げ全身体状態に影響を及ぼす	ヒマン油として、通常成人は15~30ml(増量限度60ml)、小児は3~15ml、乳児は1~5mlをそのまま又は水、牛乳などに浮かべて頓用する。なお、年齢、症状により適宜増減。高齢者で減量。	便秘症、食中毒時における腸管内容物の除去、消化管検査時又は手術前後における腸管内容物の排除
	センナ	センナエキス製剤:アジャストAコーワ 有効成分: Cassia angustifolia Vahl又は Cassia actifolia Delile (Leguminosae)の小葉を乾燥したセンナより抽出したエキス					0.1%~5%未満(腹痛、悪心・嘔吐)、頻度不明(腹痛)	頻度不明(過敏症)				禁忌:・本剤又はセンノシド製剤に過敏症の既往歴・急性腹痛、痙攣性便秘(腹痛等を増悪) ・重症の硬結(便秘痛等の症状増悪) ・電解質失調(大量投与で状態を悪化) 原則禁忌:妊婦又は妊娠している可能性のある婦人	腹部手術後の患者、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児				電解質失調(特に低カリウム血症)への大量投与で下痢による電解質喪失。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人への大量投与で流産の危険性。	運用による耐性の増大等のため効果が減弱し、薬剤に頼りがちになることがあるので長期運用を避けること	センナエキスとして、通常成人1回80mg(2錠)を就寝前に経口投与する。高度の便秘には、1回160~240mg(4~6錠)までを頓用として経口投与する。速用する場合は、1回40~80mg(1~2錠)を毎食後経口投与する。小児(6~12歳)は、1回40mg(1錠)を就寝前経口投与する。	便秘症	
	センノシド	ブルゼニド ブルゼニドは、大腸に至り、腸内細菌の作用でレインアンズロンを生成し大腸の蠕動運動を亢進。作用発現は通常投与後8~10時間。					5%以上又は頻度不明(腹痛、低カリウム血症)、0.1%~0.5%未満(悪心・嘔吐、腹痛)	5%以上又は頻度不明(過敏症)				禁忌:・本剤又はセンノシド製剤に過敏症の既往歴・急性腹痛、痙攣性便秘(腹痛等を増悪) ・重症の硬結(便秘痛等の症状増悪) ・電解質失調(大量投与で状態を悪化) 原則禁忌:妊婦又は妊娠している可能性のある婦人	腹部手術後の患者、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児			1回48mgまで	電解質失調(特に低カリウム血症)への大量投与で下痢による電解質喪失。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人への大量投与で流産の危険性。	運用による耐性の増大等のため効果が減弱し、薬剤に頼りがちになることがあるので長期運用を避けること	センノシドA・Bとして、通常成人1日1回12~24mg(1~2錠)を就寝前に経口投与する。高度の便秘には、1回48mg(4錠)まで増量することができる。なお、年齢、症状により適宜増減する。	便秘症	
	ピコスルファート	ラクソベロン錠 ピコスルファートナトリウムは、腸管粘膜への以下作用により瀉下作用を示す。腸管蠕動運動の亢進作用(ラット)水分吸収阻害作用(ラット)					0.1~5%未満(腹痛、悪心・嘔吐、腹痛、腹部膨満感等)、頻度不明(蕁麻疹、発疹、AST(GOT)上昇、ALT(GPT)上昇等)					急性腹部疾患(症状が増悪)	妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、高齢者							1. 通常、成人に対して1日1回2~3錠を経口投与する。7~15才の小児に対して、1日1回2錠を経口投与する。 2. 通常、成人に対して1日1回2~3錠を経口投与する。 3. 通常、成人に対して1日1回2~3錠を経口投与する。 以上、年齢、症状により適宜増減する。高齢者で減量する。	1. 各種便秘症 2. 術後排便補助 3. 造影剤(硫酸バリウム)投与後の排便促進

瀉下薬(下剤)

製品群No. 17

ワークシートNo.15

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 常用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果												
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ								薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
評価の視点		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意								使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ											
	ピサコシル ト坐薬	結腸・直腸の 粘膜に選択 的に作用し、 蠕動運動を 促進する。腸 粘膜への直 接作用により、 排便反射を 刺激する。結 腸腔内にお ける水分の 吸収を抑制し、 内容積を増 大する。					頻度不明 (直腸刺激感、 直腸炎、腹 部不快感、 腹痛、肛門 部痛、肛門 部不快感等)	頻度不明 (過敏症状)									急性腹症・痙 攣性便秘・重 結便(症状の 悪化) ・肛門裂創、潰 瘍性痔核(坐 剤挿入に伴 う物理的、機 械的な刺激を 避けるため)	妊婦又は妊婦 している可能性 のある婦人				妊婦又は妊婦 している可能性 のある婦人へ の大量投与で 流産の危険性。 なお、年齢、 症状により適 宜増減する。	便秘症 消化管検査時 又は手術前後 における腸管 内容物の排除	
膨潤性 下剤成分	カルボキシメ ルセルロスナ トリウム	腸管内で水分 を吸収して膨 張し、ゼラチ ン様の塊とな って腸管壁を 物理的に刺激 する。この作 用により大腸 の蠕動運動を 促進して排便 を促す。					0.1~5% 未満(悪心・ 嘔吐、腹部膨 満感等)										高性腹症・重 結便(症状を 悪化)	妊婦又は妊婦 している可能性 のある婦人、小 児				妊婦又は妊婦 している可能性 のある婦人へ の大量投与で 流産の危険性。 なお、年齢、 症状により適 宜増減する。	通常、成人1日1.5~6g を、多量の水と ともに、3回に 分割経口投与す る。 なお、年齢、 症状により適 宜増減する。	便秘症
塩類 下剤成分	酸化マグネ シウム	マグラックス 錠200mg/ マグラックス 錠250mg/ マグラックス 錠330mg	胃内で制酸 作用。腸内 での水分の再 吸収に抑制 的に働き腸管 内容物が膨 張し腸管に機 械的な刺激を 与えて排便を 容易にする。				頻度不明 (高マグネ シウム血症、 下痢)										腎障害、心機能障 害、下痢、高マグ ネシウム血症、高 齢者				長期・大量投 与により胃・腸 管内に結石を形 成し、腸閉塞を 起こしたとの報 告。高マグネシ ウム血症	長期・大量投 与により胃・ 腸管内に結石 を形成し、腸 閉塞を起こした との報告。高 マグネシウム血 症	1.酸化マグネシウムとし て、通常成人1日0.5~1.0g を数回に分割経口投与す る。 2.酸化マグネシウムとし て、通常成人1日2gを食前 又は食後の3回に分割経 口投与するか、又は就寝 前に1回投与する。 3.酸化マグネシウムとし て、通常成人1日0.2~0.6g を多量の水とともに経口 投与する。 なお、いずれの場合も年 齢、症状により適宜増減 する。高齢者では減量。	1.下記疾患に おける制酸作 用と症状の改 善(十二指腸 潰瘍、胃炎 (急・慢性胃 炎、薬剤性胃 炎を含む)、上 部消化管機能 異常(神経性 食思不振、い わゆる胃下垂 症、胃酸過多 症を含む) 2.便秘症 3.尿路尿酸カ ルシウム結石 の発生予防
	硫酸マグネ シウム	硫酸マグネ シウム	しゃ下作用														腎障害、高マグ ネシウム血症、心 疾患、腸内寄生 虫疾患の小児、 高齢者、妊婦				多量投与により、 中毒。	硫酸マグネシウムとし て1回5~15gを多量 の水とともに経 口投与する。	便秘症	
潤滑性 下剤成分	ジオクチルソ ジウムスルホ サクシネート																							